

(第3種郵便物認可)

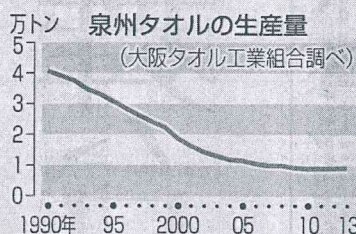
今治に負けられへん! 泉州タオル 巻き返しへ

大阪

100年以上の歴史を持つ大阪・泉州タオルが復活に向けて動き始めた。手軽な日用品を得意としていたため中国の低価格品に押されていたが、生産量は下げ止まってきた。国産の安心感と抗菌加工などの機能を前面に出し、四国の「今治タオル」に負けないよう巻き返しを進めている。

抗菌や吸水性 機能アピール ブランド力強化も

泉州は今治と並び、国内の二大タオル産地。大阪府泉佐野市周辺で、明治時代から生産が続く。今治タオル



が織る前に糸に染色する「先染め先ざらし」の対し、泉州は織った後に染める「後染め後ざらし」で、製法が異なる。

先ざらしは、複雑な柄の高級品に適している。後ざらしは織った後に漂白や染色をするため、複雑な柄には向かず、風呂用の手ぬぐいなどに使われてきた。

大阪タオル工業組合

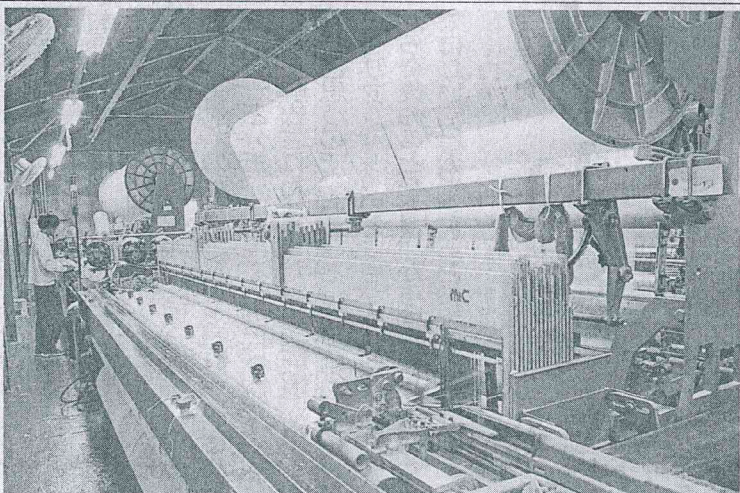
(泉佐野市)によると、泉州タオルの生産量は1990年の4万731トがピーク。中国製品に押されて2010年には8845トにまで落ち込んだ。しかし、11年の生産量は8951トと前年比で微増に転じた。13年は9067トと踏ん張る。

業界関係者は「肌に触れるものだけに国産は安心」とPR。ガラスや鏡の表面を拭くと

曇りにくくなる曇り止め加工や、放射性セシウムが吸着しにくい抗菌セシウム加工など、機能を強調したことも功を奏した。

神藤タオル(泉佐野市)は吸水性の高い「本ざらし」の商品を投入。新興タオル(同)は重量が従来品の半分という子ども向けタオルを開発した。泉州タオル全体のブランド力を上げる努力

大型の織機でタオルを織る工場 大阪府泉佐野市



も始めた。組合は、JR大阪駅北側「うめきた」のグランフロント大阪で展示会を開催。直営店を泉佐野市のんくうプレミアム・アウトレットに期間限定で出店している。